

若手歌人をめぐって 黒岩剛仁

「塔」六月号に掲載された評論「へ一瞬」を信じないということ

——若手歌人をめぐって」を、なるほどな、と感じつつ読んだ。筆者は、大森静佳。昨年の角川短歌賞受賞者である。結社誌に載った文章ゆえ、読んでいない人も多いだろうと思うので、紹介したい。

・いつまでも軋みつづけるブランコの彼方にあつてふりそそぐ夏

吉田竜宇

・夏はゆく何度でもゆくだから僕は捕まへたくて虫籠を置く

山田 航

・残像のあなたと踊り合いながらあらゆる夏は言葉が許す

堂園昌彦

夏が詠まれたこれら三首と、小野茂樹、河野裕子の著名な夏の歌、横山未来子の〈あをき血を透かせる雨後の葉のごとく鮮しく見る半袖のきみ〉や俵万智の〈思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ〉とを比較し、二十代の作者三人の歌について、「三者三様の詠い方ではあるが、ある特定の夏ではなく、過去や未来に存在するすべての夏が、それらがまるで等価値であるかのように詠われているのが面白い」と言い、さらに、「自分だけの個別な、特別な記憶を武器とし、事物に存在感を持たせ

ることで「へ一瞬」の再現を目指すという従来の作歌スタンスとは完全に異なるように感じる」と述べる。

ここで、大森は、穂村弘『短歌の友人』中の塚本邦雄について書かれた部分に注目する。

（前略）塚本的な「何か」は、自らの表現が未来と響き合うことを期待している、とても云えばいいだろうか。ここで云う未来とは過去の反対語としてのそれではなく、現実を統べる直線的な時間の流れからの逸脱そのものであるような幻の時である。

（穂村弘『短歌の友人』より）

その上で、大森は、栗木京子の観覧車を詠んだ著名な歌と学生短歌会の会誌から引いたという次の一首とを読み比べつつ言う。

・どんなにか疲れただろうたましいを支えつつづけてその観覧車

井上法子

（前略）井上の観覧車の歌は過去ではなく「幻の時」と響き合うおうとしている。（中略）塚本邦雄の死によって、「実感の表現」とは別の価値を支えていた筈のみなない風が途絶えてしまった、と穂村弘は述べたが、今、若手歌人の間で再びその萌芽が生まれつつあるのではないだろうか。

もちろん、若手歌人の中には、大森が取り上げた数人以外に、屋良健一郎や大森自身のように、輪郭のある事物を詠み込みながら、実感に根ざした作品を生み出している人たちもいる。しかしながら、大胆にも塚本と若手歌人たちを結び付けたこの大森の文章を読んだことにより、ここ数年「最近の若者たちの歌は……」と距離を感じてしまっていた五十代の私の意識に、新たな風が吹き込まれたということも正直に告白しておかねばならない。